

狂気と精神医療の歴史における精神障がい者処遇問題と看護

広島文化学園大学看護学部

佐々木 秀美, 棚田 芳彦

要旨 狂気とは何か？本論では、フーコーの『狂気の歴史』を参考に、精神障がい者取り扱い改善に向けたディックスの取り組みとそれ以降の精神病院の入院体験者の自伝的小説の内容検証から、精神医療の歴史を概観しつつ、精神障がい者処遇問題について検証し、精神看護について検討した。ビーズやウォードの入院体験に見る限り、問題は、医療従事者が彼らに施療する際に行う説明と同意が皆無だったことであり、拘束や虐待といった精神病院の劣悪な環境の中にあっては、患者を回復に導くどころか、何をされるかわからない患者の抵抗は、医療者の目には狂暴とみなされ、暴力的な抑え込みにつながり、相互の闘争に発展する。相手を理解するという態度は目に現れ、患者を受容した態度になった時、対人関係が良好になり、相互に信頼関係が生まれていくと考えられた。であるならばやはり、基本的なところでは、精神看護ではケアを行う者とケアを受ける側との信頼関係が重要である。フーコーが『狂気の歴史』で論じたように、人権問題であり、精神障がい者に対しては、心から敬意をもって接する必要がある。

キーワード：狂人の歴史、精神医学の歴史、精神障がい者、ディックス、精神看護

■ はじめに

人を狂気にさせる、又は狂気の行動に走らせる、それは一体何か？身近に起きた日本の元内閣総理大臣安倍晋三氏（1954-2022）殺害の犯人は、犯人の母親が元統一教会にのめりこんで、多くの財産を貢いで家庭崩壊に導いたこと、その宗教団体と阿部氏との関係性から彼を狙ったものである。非常にショッキングな出来事の背景に犯人の素顔が徐々に明らかになる。家庭崩壊がもたらした貧困とその恨みの蓄積が彼を狂気とも思える犯行へと走らせる。この暴走とも呼べる犯罪は、いつの時代にもある。戦争による大量殺人も又、しかりである。

『狂気の歴史』¹⁾を書いたミシェル・フーコー（Michel Foucault 1926-1984）は、「人間が狂気じみているのは必然的である」²⁾と述べ、「狂気と狂人は、威嚇と嘲笑、世界のもっている目がくらむほどの非理性、人間の持っている愚かさという多義的な姿をした中心人物となる。」³⁾と述べている。今回の銃撃事件の犯人は一瞬狂人だったのか。あるいは、常に狂人だったのか。彼の周到な武器の試作と警護のスキを突いた一瞬の行動には非理性という感覚はなく、むしろ、目的達成に向けた非情なまでの冷酷さが伺える。彼は狂人なのか。フーコーの著作は『阿呆船』⁴⁾からその歴史が始まる。彼は狂人の歴史を書くことで、精神医療の問題を浮き彫りにしており、その内容は愚かな人間の歴史である。

そして、エドワード・ショーター（Edward Shorter 1941- ）の『精神医学の歴史』⁵⁾は隔離の時代から薬物療法に至る過程であり、ドロシア・リンド・ディックス（Dorothea Lynde Dix 1802-1887）の取

連絡先：佐々木 秀美
〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3
E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

り組みから歴史が展開される。“狂人病院の天使”と呼ばれたディックスは、精神を病んだ人々の社会的問題に取り組んだ19世紀初頭の著名なアメリカ人である。日常的に我を失って、通常の生活ができなくなっている精神障がい者が家庭や道路の檻の中に閉じ困られ、辱めを受けている社会的問題の改善に自身の生涯を傾けた女性である。アメリカの精神病者の取り扱いに関する改革はディックスの業績に負うところが大きいですが、本当に精神病院の医療・看護は改善されたのか？

1908年（明治41年）、精神病院のずさんな医療体制を暴露したクリフォード・W・ビーズ（Clifford Whittingham Beers 1876-1943）の自伝的小説『わが魂に会うまで』⁶⁾、1941年（昭和16年）のメアリー・ジェーン・ウォード（Mary Jane Ward 1905-1981）の自伝的小説『The Snake Pit』⁷⁾等で彼らが総じて訴えるのは、精神病院環境の劣悪さであり、医療関係者の患者への虐待の事実である。これらの小説は20世紀初頭の作品であり、ディックスの改革から一世紀近くも後のことである。小説の内容はアメリカ社会に衝撃を与えたが、精神衛生の問題に関する取り組みへの前進でもあった。『医療・看護の歴史』⁸⁾には、アメリカにおける精神科看護及び精神衛生に関する歴史的展開について述べ、それらの研究領域として、精神医学の発達と心理学の創設などが重要な役割を果たした⁹⁾と述べている。

そこで、本論では、フーコーの『狂気の歴史』を参考に、精神障がい者取り扱い改善に向けたディックスの取り組みとそれ以降の精神病院の入院体験者の自伝的小説の内容検証から、精神医療の歴史を概観しつつ、精神障がい者処遇問題について検証し、精神看護について検討する。

■ 狂気の歴史

『狂気の歴史』を書いたフーコーは、フランスの哲学者、作家、政治家である。狂気の“狂”という意味は、くるうとか気がふれるとかの意味がある。そして、狂が含まれる言葉としては、狂歌（キョウカ）、狂気（キョウキ）、狂喜（キョウキ）、狂喜乱舞（キョウキランブ）、狂犬（キョウケン）、狂言（キョウゲン）、狂信（キョウシン）、狂想（キョウソウ）、狂暴（キョウボウ）、狂乱（キョウラン）、狂惑（キョウワク）、酔狂（スイキョウ）、熱狂（ネツキョウ）等、私たちが日常的に使用する言語の中にある。しかしながら、この“狂”の字が示す言語には計り知れない執念・執着等人間の病んだ奥深い闇の世界がある。

著作は精神病者が奇人変人として見世物になっていた時代から、監獄と同じように閉じ込めの時代、そして精神病院での施療、そして、テューク・ウィリアム（Tuke William 1732-1822）の取り組みへと時代を遡る。テュークは、モラル・トリートメント（moral treatment）という治療法を自身が設立した精神病院に導入し、自然環境の中で緩和と慰めの体系の中で、患者の病状軽減に努めた人物とされる。モラル・トリートメントというのは、フランスの精神科医フリップ・ピネル（Philippe Pinel 1745-1828）の人権思想による精神障がい者の治療法である。その治療法は医師と患者の人間関係の上に成立する治療法であり、精神病の患者を鎖から解き放ち、生活環境を整え、患者の生活時間の中に散歩や、娯楽などを組み入れていく方法である。フーコーは著作の中で、主に権力と知識の関係、そしてそれらが社会制度を通じた社会統制の形としてどのように使われるかを論じ、西欧において変容してきた狂気の内実を歴史的な次元においてとらえようとした。それは、それ以前の人間科学が、人間の精神という問題の歴史的実践をなおざりにしてきたことへの批判でもあった。人は神の理性（Reason of God）には近づきえないがしかし、狂人は違った。あらゆる人間は欲望と異物に弱いものだ。したがって、正常でない人間を神の理性に接近しすぎた存在と見なす考えは、中世社会で広く受け入れられていたとフーコーは述べる。そして、狂気は、夢想的・宇宙的な強迫観念を離れ、理性との関係においてとらえられるようになり、より人間的なものに限定された。

フーコーは、“阿呆船”に乗り込んでいる狂人たちは守銭奴、密告者、酔っ払い、放蕩三昧、姦通など、ほとんど徳とは縁遠いどちらかと言えば犯罪者の集団である。ゆえに、犯罪者たちには治療より、徳について教え込む必要があると彼は考える。“阿呆船”とは、1494年のドイツの作家ゼバスティアン・ブランド（Sebastian Brant 1458-1521）によって書かれた『阿呆船』¹⁰⁾のことである。ありとあらゆる種類・階層の偏執狂、愚者、白痴、うすのろ、道化といった阿呆の群が、一隻の船に乗り合わせて、阿呆国ナ

ラゴニアめざして出航するという諷刺文学である。112種類の阿呆を、滑稽な木版画の挿絵とともに描写している。フーコーの著作は、この阿呆船のエピソードが重要な要素となっている。ちなみに訳者は“阿呆”という言葉を使用しているが、これは愚か者 (fool) という意味であり、関西方面では良く使用され、関東では“馬鹿”と言う言葉を良く使う。阿呆の由来はかの阿呆船にもあるが、馬鹿の語源は司馬遷の『史記』にある。秦の始皇帝二世の時代に一人の高官が自身の権力を誇示するために馬の代わりに鹿を皇帝に献上し、馬だと言い放った。高官を恐れた他の臣下がやはり、鹿を馬だという。皇帝は確かに鹿に見えるのだが、周囲の者が全員馬だというのだから、やはり、自分が血迷ったのかと思い、馬だと言う。自身の権力が皇帝をも従わせたという事であるが、こうした権力欲者も阿呆の軍団に入る者たちだ。

本著では又、イタリアの聖職者であるファウステイーノ・ペリザウリ (Faustino Perisauli 1450-1523) の『痴愚神の勝利』¹¹⁾ も参考にしているが、著作における痴愚神は狂人である。「おお、天地の卑しき敵なる族よ、意地悪で生意気で、悲しくて、残忍で、人を惑わす狂気の者よ」¹²⁾ と書き、魔術の空しさの章では「おお、狂人よ、汝は何を錯乱しているのか」¹³⁾ と述べ、「汝が良く召還した復讐の女神たちに汝を手渡しに死神がやってこよう。そこで、汝は痴愚の苦い責め苦を蒙り、その清算をすることであろう。それこそ愚の骨頂ではないのか？」と悪魔祓いの愚かさを述べる。狂気が悪魔の仕業であるとして神仏に頼り、特別な儀式やお祓いをしたりするのは洋の東西を問わない。日本でも気がふれた人を“狐憑き”とか言ってお祓いをした時代があった。

狂気は認識の問題である。一般的に私たちの5感を通して現象が感知され、認識されると私たちは反応し・行動する。狂気の者達の誤認識、すなわち、幻視や幻聴があったら必然的に、彼らのみに見えたり、聞こえたりする。それに応えれば、内容によっては恐怖に怯え、闘い、独語等の言動になる。こうした言動は常人には理解されない。認識の問題は、当事者の経験に訴えかけずに、ほこりをかぶった書籍や、役にもたため議論の中に埋もれているために、「学問じたいが、極端ないつわりの学問と化すことによって痴愚 (狂気) に陥っている」¹⁴⁾ とフーコーは述べる。そして、「狂人療養院では、つなぎとめられ命令をくだされた、うつろな頭の人々が人間どものまことの理性に服従して、たとえば矛盾と皮肉を、知恵の二重の言語をしゃべっている。」¹⁵⁾ と彼は言う。狂乱の為に突拍子もない行動に出る彼らを理性のある人間が押さえつける。狂人たちは裸も同然でぼろをまとい、寒さをしのぐためにただ薬しか持ち合わせていない。「生きるのに必死なもっとも大切なものが欠けているのを、わたしは見た。彼らが正真正銘の獄史に引き渡され、その残酷な監視下におかれているのを見た。」¹⁶⁾ とフーコーは述べている。

狂気に対する罰と法等に対する罰との間の近親関係とフーコーは述べるが、例えば、「性病者は、施療院へと詰め込まれる。125の寝台に224名の女が詰め込まれ、治療と言え、最初に瀉血が行われ、次に下剤がかけられる。次の1週間は1日2時間の水浴が行われ、再び下剤がかけられる。この一連の治療が終わったのち、水銀を使うマッサージが1か月続く。そのあと、二度下剤がかけられ、一度、瀉血が行われることによって体に残る悪性の体液を追い出す。この後、2週間の回復期が与えられ、患者は放免される。」¹⁷⁾ この一連の行程は施療なのか、罰なのか。同性愛は非理性的な愛に属し、精神分析におけるあらゆる狂気は何らかの性愛障害に根拠があるとした。性病は不浄なものであり、浄化される必要があった。とはいえ、これは錯乱して精神病院に入所した患者にも同様に行われた。つまり、瀉血、下剤、水浴、水銀等の一連の過程は、ロンドンのベツレヘム病院や州立病院での監禁状態での治療法であった。理解不能な人間たちが、システマティックに監禁され、収容されていた。18世紀には、狂気は、理性そのものを観察するかのように扱われるようになった。つまり、狂人は彼らを人間足らしめていたはずの何かが失われ、動物じみた存在になり、そしてまた実際彼らは動物のように扱われた。

気違いは気違いである以上、集団からは隔離されなければならない、としたら監禁は必然であった。そして、精神病院における監禁は、囚人を監禁する『監獄の誕生』¹⁸⁾ と微妙につながっていくのである。監視と処罰、身体の拘束と肉体への罰、それが魂への罰につながる。いかにして平常心でいられるのか。監禁は、真理へのより忠実な結びつきのための、道徳上の矯正という機能を持っており、一種の矯正収容所と化すような、教育的な訓練施設の側面を有していた。狂人を見世物にする¹⁹⁾ という愚行は一般的に行われていた。監禁は貧乏を生み出し、施療院は狂気を生み出す。治療の自然な場所は家庭にあるとフーコーは述べる。

フーコーが示したのは、狂人のために特化した医療施設ではなく、社会的なアウトサイダーを監禁するための施設が造られたということである。そこには、狂人だけでなく、浮浪者、失業者、虚弱者、孤児なども含まれていた。そういった人間たちを監禁するための施設が、西欧社会における狂人と狂気概念にどのような影響を与えたのか。フーコーは、そのことを問題にしていたのである。狂気のせいで、悪しき本能・邪悪・苦悩・狂暴といった内面的世界、それまでずっと眠ったままであった世界が、突如として現れるのである²⁰⁾とフーコーは述べ、狂気が人間の究極的な真理を明るみに出すと論じている。最後にフーコーは、狂人保養院の誕生は、心の激情や精神の混乱がゆっくりと和らぐとしてテュークとピネルの業績を評価する。クエーカー教徒であり、慈善家のテュークは、1796年（寛政8年）に初めて精神病患者のための施設、ヨーク・リトリートを創設し、ピネル提唱のモラル・トリートメント（moral treatment）を導入した。この治療法はイギリス人のモットーとなった²¹⁾。ピネルは、フランスの医学者、精神科医でもある。彼は人権思想に基づいてこの治療を開発し、施したとされる。フーコーは、心の激情や精神の混乱がゆっくりと和らぐテュークとピネルの治療法を評価しつつ、狂人保養院の誕生は、到達点ではないと述べる。テュークやピネルのみならず19世紀後半、シグ蒙德・フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）が登場することで、はじめて狂気が精神の不調であり、治療することのできるものと考えられるようになった。

■ 狂人病院の天使—ドロシア・リンド・ディックス

1. ドロシア・リンド・ディックス

ディックスは精神病院の天使としても有名であるが、人生の後半に遭遇した南北戦争時の陸軍部隊を率いた人物としても知られる。日本精神科看護の草分け的存在の浦野シマ（1913-不詳）も精神病院の天使として著作『精神科看護婦』²²⁾にディックスを紹介、1955年（昭和30年）の『リーダーズ・ダイジェスト』²³⁾にも、ここ300年間にアメリカが生んだ恐らく尤も卓越した女性、“狂人病院の天使”という見出しでその業績を紹介している。

『Life of Dorothea Lynde Dix』²⁴⁾によれば、ディックスはアメリカメイン州ハンブデンの町で生まれた。幼い頃はマサチューセッツ州ウースターで育った。両親はアルコール依存症で、特に移動労働者であった父親からは虐待を受けた。そこで、ディックスはボストンにある裕福な祖母のところに逃げ込み、支援を受けた。1821年（文政4年）にディックスはボストンで富裕層からの支援をとりつけて、困窮し、家庭で適切なケアを受けていない子どもたちの教育をはじめた。しかし、元来、虚弱体質であったためか健康を害したディックスは、教育を中断し、1830年（天保元年）頃まで執筆活動をした。体調が回復した1831年（天保2年）に再度ボストンに女子のための模範校を設立し、教育を再開した。1836年（天保7年）まで教育を続けたが、再度健康を害してしまった。そこで、保養目的でイギリスに旅行し、その地でリヴァプールの商人と船主たちの間に代々君臨してきた一族の筆頭であるウィリアム・ラズボーン（William Rathbone 1819-1902）と知り合いになった。ラスボーン一族はクエーカー教徒で、社会改革運動で顕著な業績をあげている人々であった。イギリスでは又、精神疾患にかかった者のケアを改革することをめざす、狂気改革（lunacy reform）と呼ばれる運動についても知る事ができた。

1840年（天保11年）、ディックスはアメリカに帰国した。1841年（天保12年）、彼女は、教育の折、イーストンケンブリッジ郊外の矯正院女子部の中に、数名の精神病患者がいて、暖房も寝具もなく、豚以上に汚れきった一室に監禁されている光景を目撃していた。精神病患者の実態に触れたその瞬間から彼女の生活は一変した。ケンブリッジにおける調査では「気違いは生まれながら凶悪な人間だから、危険な動物として取り扱うのが一番よい。鎖の手錠をして厳重に監禁しておくのが唯一の便法だと考えられていた。もっと悪いことには典獄や付き添いの多くが気違い家の見物に来る人たちから観覧料を取って懐を肥やしていることであった。実際、この不幸せな人たちがへんてこな仕草をするのを眺めたり、わめくのを聞いたり、あるいはステッキで突っついて怒らせたりすることは、大変面白い遊びだと考えられていたのである。」²⁵⁾典獄というのは、刑務所の長のことを言う。ディックスはマサチューセッツ州全土で困窮した精神病患者のケアについての調査を行った。そして、この哀れな精神病患者を人間扱いしてもらった

めの大きな戦いの旅に出た。

その後の2年間、彼女はマサチューセッツの刑務所や救貧院などの調査を行った。ボストン郊外の養育院では若い女性が小さな離れ家に一人ぼっちで監禁されていた。「女は立って髪を振り乱し、体は汚れ放題で鉄格子にしがみつき、鉄格子をたたいていた。そこは汚物がだんだん溜まるのがやっというほどの狭いところで、それはまことに不潔極まる光景であった。」²⁶⁾ ニュートンの町でトイレほどの狭いところに鎖でつながれている女性、グロートンでは若い男が重い鉄輪首にはめられ、2メートルに近い剛鉄の鎖で壁につながれているのを見た。リトル・コンプトンでは片足を鎖につながれて、わずか二メートル四方の石の独房に居るのを見た。光も入らず、空気の通う口もなかった。それは図らずも浦野の著作『精神科看護の歴史』の冒頭に表現した“ダンテの戯曲 地獄の門”の描写にふさわしい地獄絵そのものであったろうか。ディックスは1843年（天保14年）、マサチューセッツ州へ建白書を書いた。「紳士諸氏、私はわが州内に檻の中で、押入れの中で、地下室で、馬車の中で、豚小屋の中で、全裸のまま鎖につながれ、鞭で打たれ、体刑を加えられて服従を強いられている精神病患者の恐るべき実態に、諸氏のご注意を喚起したく存じます。」²⁷⁾

ディックスの建白書によってマサチューセッツ州は慌ててオアセスター病院の中に200人分の上等の病室を用意した。ディックスは精神病患者保護のために活動を続けた。それはイギリス・スコットランドにも及び、政府の要官に訴えて1855年（安政2年）、精神病改革のための王立委員会を設立させたほどである。

ディックスが精神病患者の為の戦いにでた1841年（天保12年）、ニコラス・ブラウン (Nicholas Brown) は、狂人のための収容施設に3万ドルを寄付、彼の寄付によってアメリカ最高のバトラー病院が設立されたが、1955年（昭和30年）に閉鎖、1957年（昭和32年）に種々の保健・福祉機関のバトラー保健センターが開設された。しかし、精神看護を引き受ける看護婦の地位は高いものではなかった。ナイチンゲールが、1851年（嘉永4年）に、家族から自立して最初に看護監督官として赴任した病院はロンドンの婦人病院であった。彼女がそこに見たものは、将来への不安から精神を冒された女性達の姿であった。彼女は女性達が「Dead Body」²⁸⁾ になっていると述べ、人の精神の問題が置き去りにされていると言及した。心理学が哲学から独立した日は浅い。

2. ディックスの精神病患者の取り扱いに関する改革運動はわが国にも

そしてディックスの精神病患者の取り扱いに関する改革運動はわが国にも及んだ。それは、森有礼 (1847-1889) によって始められたと言っても過言ではない。森は若くして文部大臣となり、学校教育政策に深く関与した人物として知られる。内村鑑三 (1861-1930) は、著作『余は如何にして基督信徒となりし乎』²⁹⁾ でディックスについて紹介し、当時の駐米大使森を動かして日本で白痴院を設立させたと記述している³⁰⁾。ディックスの生涯誌である『Life of Dorothea Lynde Dix』の最後の章、「The Last of Earth」³¹⁾ には森の手紙が挿入され、両者の出会いについて述べられている。それによれば精神病患者の人道的な治療法を世界に広げたいと思っていたディックスは、日本から代理公使として森が渡米したことを知った。森に対して積極的にアプローチし、熱心な会談を行った。森がディックスに宛てた手紙には、「親愛なるディックス様、長い間ご無沙汰しています。貴方が深く考えておられ、私と約束した事業に関して、決してなほざりにしていたわけではありません。私はその後、多くの時間を本件に注ぎ、終に京都に一つの癲癇病院を首尾よく設立し、今また東京に一つ、設立準備中であり、近いうちに完成すると思います。願わくは、多くの不幸な方々が少しでも、減少したという手紙が書けるようになることを熱望いたします。」³²⁾ と書いている。以上の手紙の内容からディックスと森との間に、日本における精神病患者の人道的な取り扱いに対しての約束ごとの一つとして、適切な収容施設を設置する約束があったのであろう。森は京都に一つ、東京には設立中であると手紙に書いている。森の手紙は1875年（明治8年）と日付が書かれている。京都のそれは京都癲癇院であり、東京のそれは東京府癲狂病院（現在の都立松沢病院）であろう。松沢病院の歴史は即ち、精神病患者の取り扱いに対する新たな歴史の始まりである。都立松沢病院については『松沢病院120年史』³³⁾ 及び『日本精神科看護史』にその設立経緯について改めて論じることとし、ここではまず、森が最初に京都に設立されたと述べる癲癇病院から追ってみる。

『精神衛生のあけぼの』³⁴⁾、『癲狂院の医学的背景』³⁵⁾によれば、京都癲狂院は府官、明石博高(1839-1910)の建議によって1875年(明治8年)に設立されたと記述されている。この日付は森の手紙の日付と合致している。『明治文化と明石博高翁明石博高』には、岩倉具視(1825-1883)の指示によって大阪に病院(後に大阪帝国大学医学部)を建てたこと³⁶⁾、京都府療病院や医学校を建てたこと³⁷⁾、1875年(明治8年)に府療病院の附属として南禅寺に癲狂院を設立したこと³⁸⁾などが記述されている。『明石博高』³⁹⁾も含め、明石と森との交流については一切触れられていない。従って、明石に直接的な指示をしたのは岩倉であり、岩倉にその事業を託したのが森であったと考えられる。森がアメリカ在中に岩倉使節団に参与していたことはわが国の歴史的事実である。『南禅寺の歴史』には「討幕運動の中心理論は尊王思想であり、仏教とは対立的な神道を基調」⁴⁰⁾と記述され、明治政府の高圧的ともいえる仏教政策は武士階級に保護され、発展してきた臨濟宗とその性格の一番濃厚であった南禅寺との関係において顕著であったとしている。そのいやがらせの一つが南禅寺境内に設立された癲狂院であったということであろう。京都癲狂病院の設立によって精神病医学が導入され、精神を患っている人に対する取り扱いが大きく変化したのである。しかしながら、南禅寺方丈という建物に設立された京都癲狂院は一時的な貸与という形であり、寺院側からのたびたびの催促によって1882年(明治15年)癲狂院廃止が決定され、返還された。

次に、森が東京に今一つと述べた精神病院は、恐らく東京都立松沢病院であろう。明治維新後、江戸は東京府となり、日本の首府となった。廃藩置県や内戦のために無宿人や病者が急増した。東京府がはじめて精神病者を収容したのは1872年(明治5年)のことである。本郷の加賀屋敷内に不具廢疾教育所を開設し、その中の癲狂室に患者を収容し保護していた。同年、養育院が設立され、その中に狂人室が設けられた。収容者が120名に達し、身体疾患の重傷者は東京府病院に移されたが、精神病患者が68名も存在した。養育院が神田に移転するのを契機に、1879年(明治12年)正式に東京府癲狂病院が設立された。初代院長は長谷川泰(1842-1912)である。この頃は独房であり、不潔な状態で監禁されていた。1881年(明治14年)、東京府癲狂病院は本郷東片町に移転、精神科医ではない中井常次郎(1851-1914)が2代目院長となった。彼は精神病院の看護にはじめて女性の看護者を採用し、相部屋や運動場、庭園などを造り患者の慰安を図った。

1885年(明治18年)に伊藤博文(1841-1909)が内閣を組閣した時、文部大臣に就任した森は、明治政府を動かして東京大学の卒業生を欧州に留学させて各文化の修得にあたらせた。その時、精神病学として選任されたのが榊俣(1857-1897)である。榊はベルリン留学帰国後の1886年(明治19年)、東京帝国大学医学部精神病学講座担当教授に任命された。しかし、同大学内に精神科の病室がなかったため、東京府と相談し、東京府癲狂病院内に精神病理学教室を置くこととし、同時に三代目院長に就任した。1889年(明治22年)東京府癲狂病院は東京府巢鴨病院と改名した。次に東京府巢鴨病院の四代目院長に就任したのが呉秀三(1865-1932)であった。呉は巢鴨病院長に就任後、直ちに手革・足革・縛衣などの拘束具を廃止、女子に主として用いられていた布団まきを制限・禁止した。同時に患者に作業療法を開始した。患者の処遇や治療法についてはドイツ人医師フェルディナント・アダルベルト・ユンケル・フォン・ランゲグ(Ferdinand Adalbert Junker von Langegg 1828-1901)とイギリスの精神科医ヘンリー・モーズレー(Henry Maudsley 1835-1918)の知識が軸となった。そして、フランスの精神科医ピネルの人権思想による精神障がい者の治療法、モラル・トリートメントを導入した。呉が実施した拘束具の廃止は、ピネルの治療法に影響を受けたものであり、精神障がい者を鎖からはずした。その後、巢鴨病院は病院拡張のために荏原郡松沢村に移転し、松沢病院と改名した。この病院こそが森の述べる東京に設立されたもう一つの精神病院であろう。都立松沢病院はわが国最古の公立単科の精神病院である。我が国における精神科医療の発展はディックスと森との出会いに始まるが、その後については改めて論じることとする。

■ 証言—精神病院の実態を明らかにする

ディックスの努力によってアメリカの精神病者の扱いは改善に向かったのか。逆に精神病院への閉じ込めに発展したのではないか? 愚者としての精神病者に対する人々の偏見は根深い。その偏見は精

神病院の人的環境にも影響を与える。ここでは、精神病院入院患者としての体験記、『わが魂にあうまで』と『蛇の穴』の内容から精神病院の実態を明らかにする。

1. 『わが魂にあうまで』に見る虐待

1908年（明治41年）のビアーズの著書『A Mind That Found Itself わが魂に会うまで』は、彼が精神に異常をきたし、入院した後の虐待経験を基にした自伝的小説である。1900年（明治33年）に発病したビアーズは、精神障がい入院、入院中の悲惨な環境と虐待を克服し、自己の魂に出会うという内容である。

小説は、まず生い立ちから始まる。その生い立ちの中で、彼は、24歳から26歳までを、もう一人の私としているが、それ以前の私とそれ以降の私とも違って、彼自身が精神の市民戦争という表現をしている。ビアーズは1894年（明治27年）に高等学校の卒業証書とエール大学入学への切符を手にした。同時期、兄のてんかん発作と思われる病気の発病で家庭が崩壊、6年間の闘病生活の果てに兄は亡くなった。1900年（明治33年）にエール大学を卒業したビアーズは、就職して間もなく神経衰弱に罹った。ビアーズは、あらゆる不快な感覚と恐ろしい感覚に襲われ、希望が打ち砕かれてしまった。兄と同じてんかんになったと思ったビアーズは、頭が混乱し、死の計画で一杯になった。明け方に起きた時、彼はひっそりと窓に近づき、見たこともないほどの明るい光に導かれるように直立の状態飛び降りた。踵から落下して着地したので、両方の土踏まずの骨がほとんど砕けた。1894年（明治27年）からの6年間、自身を苦しめてきた悪夢のような恐怖は、飛び降りたと同時に一瞬にして消えた。

彼が運ばれたのは救急病院ではなく精神病院であった。入院後のビアーズにとってそこは地獄の責苦の場所になった。2階にあった部屋の窓には鉄格子がかけられていた。入院中、彼はマフという身体拘束の道具を使われ、施錠された。理由は保護の為という事であったが、彼には理解できなかった。医師の話は刑事の強制尋問に思えた。時折、襲ってくる幻聴は更に彼を苦悩に陥れた。自分の事を話しているひそひそ話は部屋の壁や天井から聞こえてきた。次に現れたのは幻視であった。幻視は決まった時間に見えた。それは刑事たちの残酷で悪辣な拷問で自分の脳を壊そうと知恵を絞っているようだと考え、何か良からぬたくらみがあると考えていた。裁判の恐怖を感じながらも次第に活気を取り戻したビアーズは、文学に興味をもちはじめた。病院は経済と商業であると思った。その為に最も低劣なタイプの人間を看護師として雇っていると考えた。

一人の看護師は彼を罵った挙句、つばを吐きつけた。この毒蛇のような男が彼の魂を傷つけたが抵抗しなかった。こうした看護師がどうやって採用されたか。ビアーズは次の様に証言する。一人の浮浪者が病院の門をくぐり、経営者に面会を申し込む。次の段階でこの浮浪者は強制的に入浴させられた後、衣服を着替えさせられ、患者の前に立たされる。浮浪者は看護師になったのである。その看護師が受け持った老人は死が迫っていた。院長に診察を求めたが、無視され続けた。院長が診察に来た時には、この気の毒な年老いた患者は死んでいた。彼の死体が病室から運び出されている時、経営者の腰巾着の男が「この病院の金のなる木のお通りだ。医者は毎週85ドル彼から儲けていたのだ。」^[41]と言った。彼は何を得たのか。ビアーズは患者の基本的な人権が無視され、しかもその死さえ、無視されたと考えた。一人だけ、もののわかる看護師がいたが、他は無能であった。一人の親切な看護師との交流は安らぎであった。病棟を替えてもこの看護師との交流は継続しなかったが、院長に禁じられた。おおよそ、精神病院の医師と看護師は無知で無神経であった。

患者とのいさかいは度々であった。彼は時折、発揚状態になった。その時は限りなく食欲があった。夕食時に一人の看護師が持参してくれたバター付きパンをゆっくり食していた時にもう一人の看護師が速く食べろと催促し、突然、パンの耳だけを残して取り上げようとしたので抵抗した。ベットに座っていた彼の喉は捕まれ、力一杯締め上げられた。もう一人の看護師が背中を押さえつけ抵抗できなくした。医師の残酷さはこの上ないと彼は考えた。医師は前触れもなく部屋にやって来て、突然、胸倉をつかみベットから突き落とした。人の不幸で金を稼いでいる男であった。骨折した足の治療と歩く訓練は、最も残酷な責め苦であり、苦行であった。回復目的の為であっても彼にはそれが理解できなかった。

精神病院では様々な身体拘束の方法があった。その方法は物理的拘束と化学的拘束である。物理的拘

束には拘束衣、拘束上着、マフ、ミトン、革紐、丈夫なシャツ等であり、化学的拘束は医学的拘束とも呼ばれ、ヒヨシン（恐らくクロルフェネシカルバミン酸エステルのような中枢神経系麻痺薬などの事か……傍点筆者）のような一時的に麻痺させる薬を用いた⁴²⁾。トラブルを起こす患者には良く使われ、数日間、意識を朦朧とさせる。それは患者の幸福が軽視されている病院に限っている。医師は時折、ジキルの・ハイド的性格が交錯する。その夜にやってきた医師は看護師に身体拘束を命じた。拘束衣に入れられたピアーズは身動き一つできない状態になり人生に消し難い記憶を残した。一時間以内に身体に激しい痛みが始まり、指先と指先が重なり合って傷つけ合い、夜明け前には痛みが通り過ぎ、麻痺したようになっていた。15時間くらい過ぎた頃に拘束衣が外されたが、抵抗する力を失っていた。その後、独房に21日間閉じ込められた。彼の訴えはほとんど無視された。

その後、州立精神病院に転院したが事態は同じであった。ピアーズは、看護師の事を、狂人の調教師と述べている。彼らは監獄の調教師と同じように誇りは高いが、技術的に未熟であると感じた。州立病院での体験も同じように暴力的であった。医師に首を絞められ、4人の看護師が襲い掛かるように身体を拘束した。

次は狂躁病院に送られた。狂躁の意味が示すがごとく、それは狂ったように騒がしい患者達が入院する場所であったと思われる。狂躁病院では重い鉄格子の窓からわずかに光と空気しか入らない。換気とは名ばかりで壁と床はむき出しのまま、家具は一つもなく、一か月以上、半飢餓状態になり、寒さと飢えで激しい苦痛があった。夜になると狂騒の大合唱を絶え間なく聴くので不眠になった。夜警は騒音を止めるために部屋に入ると必ず、患者を殴り、首を締めあげて一時的に静かにさせた。何か新しい仕事を考えていたピアーズは汚れた絨毯を引き裂いて上着を造り、寒さをしのごうと考えて行動した。次に絨毯で作り上げた布切れでロープを造り、ベットの頭部と足部にくくりつけ、もう一方の端を窓枠と欄干窓に括り付け、次に布切れのロープを摺り寄せて引っ張るとベットはピアーズを乗せたまま空間にぶら下がった。彼は、ニュートンのような面持ちでこの大発見を画期的なものとしてとらえた。しかし、彼の行動は看護師達には奇人変人の類として見られ、到底理解されない。常に発明を巡らせている間、彼は入浴ができず、水風呂に入れられた。

他の患者も含め、ピアーズ達は様々なふるまいをし、医師や看護師を休めなかった。彼らは患者同士を引き離すために保護室に入れ、保護室での振る舞いによって更に汚い場所に移した。彼は何度も脱走を試みた。自分自身のみならず、他の仲間の解放の為にも計画を練った。反抗と抵抗、要求や依頼に対して憤る看護師と患者の戦争は、ピアーズが追放される4日前まで続いた。彼の部屋に看護師たちが流れ込み、殴る・蹴るの暴力、重篤な切り傷と打ち身を受けて体力の限界を感じた。看護長も共犯であった。彼は彼らが出た後、その事実を書き留めた。騒がしく乱暴で問題を起こしやすい患者は虐待された。精神的にもあまりにも弱っており、看護師の世話が最も必要であったが、その無力さゆえに虐待された。患者を支配する最も有効な手段は最初に患者を怯えさせることだと彼らは考えたようだ。

新しく入った看護師は、医師を目指していて最初は優しくだったが、やがて残酷になった。残酷な看護師達は、患者に優しい看護師を臆病だと言って嘲笑したからである。怠惰な看護師は病棟でカードをしたり、喫煙をしたりよもやま話をしたりした。彼らも患者と同じように戸外での運動が必要だった。エネルギーが発散できない時には無力な患者に暴力をふるった。野生の動物を殴って従順にさせることはできるが、人間はそうはいかない。看護師達からの襲撃は止まない。保護室の隣の患者の助けを求める悲痛な声も聴くに堪えない。ある老人の患者は独房のベットに丸裸で横たわっていた。看護長はこの病み衰えた男を悪辣にも襲っていた。看護師の激情の犠牲になった患者はその後、死亡した。狂躁病院でピアーズのいたずら仲間であった若い男は軽快退院をしたが、自殺した。ピアーズは、自殺したこの患者は虐待と拷問と不正の記憶があまりにも長かったので、自由を得た瞬間に生きるよりどころを失い、死が生きる欲望を圧倒してしまったと考えた。

着物を返されて服装が整った時から、ピアーズの行動は急激に良くなった。行動が良くなるにつれ、失われた権利を取り戻した。保護者へ手紙を書く、絵を描く、本を読む、詩を書くなどである。保護者への手紙も検閲される中で、彼は州知事に手紙を書くことを思いついた。それは不平等な狂人への不当な処遇についてであった。手紙を受け取った州知事は精神病院の院長を尋問した。彼らはその不当な行為

を認めはしなかった。しかし、全く効果がなかったわけではない。虐待行為をした数人の看護師はやめさせられ、病院内の暴力行為も止み、平穏な日々がしばらく続いた。ビアーズは入院中の身であって、闘争的な病院改革運動はできないと悟り、静かに自分の運命に身を任せるような行動に徹した。

1903年（明治36年）、ビアーズは自由を得た。彼は精神病院に閉じ込められている人の苦難を和らげる為に、狂気の人たちがなすべきことについて多くの悟りを得た。同時に、精神病院から退院して社会に戻ったが、疑惑の念に駆られている一般の人々の態度についても悟りを得た。精神病院を出た患者は一般的に未熟な労働者として責任のない仕事なら可能であるが、責任のある仕事に就くことは不可能である。自身が雇用契約を交渉した時に体験したのは、精神障がい者に対する偏見であった。彼は精神病院改革を実行する為にはまず、自身で雇用者が満足する仕事をし、実績を造ることであると考えた。しかし、1904年（明治37年）の晩秋に軽い病気になり、休養をせざるを得なくなった。その間に世界の偉大な本をいくつか読んだ。『レ・ミゼラブル』は彼に感銘を与え、次第に一つの目的に結実していった。1905年（明治38年）、ビアーズは本を書き始めた。その後、精神病院に再入院した。この時は前回のようではなく、自身で病院を選択すること、一つの条件が受け入れられた。入院後、彼は今まで自分がなしたことの記録を書き始めた。それが本著として後世に残った。

2. 『蛇の穴』に見る精神病院における医療と看護

「大昔、ひとは狂人を蛇の穴に投げ入れた。正気の間人を発狂させるような経験が狂人を正気に立ち返らせはしまいかと考えたからである」⁴³⁾に始まる『The Snake Pit』は、ウォードが類似の経験をした自伝的小説である。そのタイトルからして不気味な印象を受けるが、昔、狂人に対してさしたる治療法がなかった時代に、蛇の穴に投げ込まれた衝撃で気が狂った状態から正気に戻るのではないかと考えられ、狂人を蛇の穴に投げ入れたとのこと。著者自身が、蛇の穴に投げ入れられたと同じような衝撃の体験から、そのタイトルがつけられたようだ。小説の主人公はヴァージニアと言い、その夫はロバートである。

ニューヨークで新しい生活を始めたヴァージニアは、小説家になりたいという夢があり、夜も寝ずに勉強を続けた。ある日、突然の発作に見舞われ、近くの州立精神病院に運ばれた。彼女が朦朧とした状態で目覚めたのは、数か月後の事であった。朦朧とした意識の中で、彼女は檻の中に動物の臭いのするうごめく集団に気付く。濃霧のようなぼんやりとした中で、うごめく集団に早く集まってと呼びかける人の声、その集団の群れの中に自分も入れと言われる。その檻の中にいるのは動物ではなく、人間だと気づくのに時間がかかった。彼女は次第に自分のいる場所が精神病院であることに気付く。戸外での運動の後の病室の臭いは耐え難かった。その臭いは催眠作用を持つパラアルデヒドという薬品であると後で知った。狂人が家畜の様に扱われる。食堂にならばされ、順番を待つ、鍵のかからない便所、それだけで十分屈辱的であったけれども、終了後のチリ紙は必要時、監視のハート嬢が必要な分だけ配っていた。

入院当初、夫のロバートはヴァージニアと面会するが、妻が自分のことも自分と結婚していることも全て忘れ去っていることに驚愕する。キック博士という尊敬すべき医師と出会った。ロバートは妻の主治医キック博士に妻との出会いから結婚、そして妻が発狂し入院するに至るまでを話し始めた。ロバートの話だけではヴァージニアの精神錯乱の原因を突き止めることはできなかったが、粘り強い治療のおかげで状態は改善して行った。P・T(Physical Therapy)という身体の訓練があった。スケートやバレーボールである。病棟を移ってからヴァージニアは日増しに良くなっていった。ここでは、編物をしたり、刺繍をしたりする職業療法(occupational therapy)があった。

その様子に安心したロバートはヴァージニアにスタッフと呼ばれる退院試験を受けさせるようにキック博士に依頼した。時期尚早とは思いつつもキック博士はヴァージニアに試験を受けさせた。しかし、試験の面談の場でヴァージニアは、院長の意地悪い質問に激しい恐怖を感じ、興奮して院長の指にかみついてしまった。それから、彼女の病状は悪化の一途をたどり、再び発狂してしまった。改めて治療をやり直して行く中で、ヴァージニアはキック博士に愛情を感じた。

第三病棟から、第一病棟、第三病棟、そして第八病棟から第三十三病棟へと移される中で、そこに入院している患者と看護婦、そして医師などとの関りはさまざまであった。どうも、この病院は、第一病棟は病状が軽く、退院が近い患者を収容しているようであり、番号が増えるごとに順次、重度化するよ

うだ。ヴァージニアが描き出す看護婦とのやり取りは以下のような内容である。“さっきも言ったけれども、あなたには協調的な気持ちがないのね。自分が優れた人間だなんぞというぬぼれは捨てなければいけないわ。もし、あなたが快くなりたかったらね。”という看護婦の言葉に対して、ヴァージニアは看護婦が正義の人間であることを考えたなら、病人に向かってそういう話し方はしようとはしないはずだと考えた。人間の精神や知性がいかにかよわいものであることか？メスの下の組織はおののき、その肉体は局部麻酔を施されて回復の光明と死の暗黒とを見る。その暗黒は、奇妙にも生と幸福な生活と患者の長い幸福な生活と呼ばれているものだ。

次に、看護婦の「おとなしくしないと詰めにやっつけてしまいますよ」という言葉、この“詰め”という言葉は良く使われた。いわゆるカバンにものを詰めるのではなく、部屋の中に缶詰めにするという意味の他に、シーツなどでふくろ詰めにするという意味もあった。そして、ヴァージニアが体験した詰めという仕置きは、冷たく濡れたシーツに身動きできないようにくるむ事であった。彼女はその詰めから逃れるのにたいぶ時間を要した。ベットから浴槽への往復の間に、彼女は穴に落ちたような感覚におそわれた。食事を拒否するというよりヴァージニアにしてみれば、穴に砂が詰め込まれていたの、何も呑み込めなかった。恐らく、それは栄養を補給するための経鼻チューブの挿入であったろう。実施前に何らかの説明があったのか、彼女の認識がなかったのか、著作にはそうした記述は一つも見当たらない。強引な手法である。鼻に管を無理やり入れられた後、ジュースなどが押し込まれる。たくましい女たちが湿ったシーツに患者の一人を抱えて落とし、まゆに入るカイコのように冷たいシーツでくるむ。あんまりなやり方だとヴァージニアは一人の看護婦に抗議する。おやまあと言って看護婦は口が利けるようになっていいことね、と言い、同じく冷たいシーツにヴァージニアをくるむ。看護婦が行ってしまった後で、彼女はこのミイラ状態から抜け出そうと身体をよじらせ、もがくうちにベットから落ちた。

次に彼女が受けた治療はショック療法 (shock therapy) であった。“貴方はショックに行くのよ”とまるで朝のミルクを飲むように精神的打撃を与えることが日常的なやり取りであった。小さな一室に連れ込まれ、仰向けに寝かされた。二人の女性が彼女の背中に支えを置き、頭とこめかみにペーストを塗り付け支えをする。看護婦の服を着た女性が足の上のしかかる。両手は縛られ、口の中に含器を押し込まれた。これは恐らく電気ショックであろう。ショック療法には別な方法もあった。カンヴァスと呼ばれる袋に詰めこまれたヴァージニアは、頂きの塔まではこぼれ、思い切り遠くまで投げ込まれる。近いと岩にぶち当たる心配があるからだ。ロバーツが小船に乗って袋に入ったヴァージニアを救い上げる計画だ。やがて彼女はボートに救い上げられ、滴のたれる覆いから姿を現す。毛布にくるまれて車で山の上の温泉につかった。そのあと、彼女は深い穴に落ちた。彼女が意識を取り戻したのは浴槽からベットへ運び込まれるときだった。深い穴の底では砂粒が鼻の孔に侵入して大声が出せない。著作では、ヴァージニアの感覚として深い穴に落ちるといふ表現が所々あるが、それは、恐らく、意識を失った事を指すのであろうか。穴から外へ出た時、彼女は鼻孔に管を当てて何かを詰め込もうとしていることに気がついた。つまりは、意識を回復したという事であると思われる。通常の食事は与えられず、何度も鼻孔から栄養を供給する手段がとられた。彼女はよろめきながら身体の釣り合いを保とうとしたが、またも穴に落ちた。

なぜ、わざわざインシュリンとか、メトラゾールとか、あるいは電気を使う必要があるのだろうか。昔、ひとは狂人を蛇の穴に投げ入れた。正気の間人を発狂させるような経験が、狂人を正気に立ち返らせはしまいかと考えたからだった。見えざる配慮かまたは偶然の仕業かはわからないが、ともかくもここでヴァージニアは、キック博士がさまざまな道具や助手の手を借りて施したのよりは、さらにいっそう痛烈なショック療法を受けたのだ。キック博士を密かに慕う看護婦が嫉妬に駆られ、ヴァージニアを“蛇の穴”と呼ばれる凶暴患者の雑居病室に入れてしまった。そこは、最重症患者が収容される第三十三病棟であった。その病棟で、自分よりもっと悪い患者を目の前にして我に返った。重度の精神障害のうごめく群れは、蛇がうごめく群れのごとくに狂人のうごめく穴にヴァージニアは投げ込まれたのだ。そこでの衝撃の体験は、ヴァージニアが己の精神が正気であるとの自信につながり、みずからの回復への希望を得たのだった⁴⁴⁾。そして、彼女は自身で思考療法 (thinking therapy) というのを考え出し、回復への道を通じた。他に精神療法 (psycho therapy) というのがあった。精神療法というのは、薬などを

使わず、話をしたり、話を聞いたりすることで治療する心理療法の事を言う。

次に新しい病棟に移された。そこでの彼女の仕事は洗面所を研ぐことだった。そしてその次に衣装室に行くように言われた。彼女は自分の服装が変わったのは服装療法(dressing therapy)なのかと考えた。衣装室でアイロンをかけている一人の女性に出会った。その女性は、もとは看護婦であり、患者の為に改革・改善を病院に求めた看護婦であったと同行した患者が説明する。彼女は、病院での看護経験であまりにもいろんなことを感じすぎたせいで、病院の改革を言い続け、結局、石の壁に頭を打ち付けて頭がおかしくなったのだそうだ。同行した他の患者がいう。「精神病院での本当の看護婦というものは改革など考えずに命令を受けたら、素直に実行すべきなのよ。」⁴⁵⁾ つまりは、素直に命令を実行すること、それは指示された治療を従順に遂行すること、つまり、総じて監獄の監視員に徹することであった。ウォードは著作を通して、自身が受けた様々な治療法(therapy)も紹介したが、ケアとは名ばかりで劣悪な精神病院の実態がそこにはあった。医師も看護婦も不足しており、トイレット・ペーパーも足りず、食物も足りない、寒くても十分なだけの毛布も不足し、シーツもベットも足りない、余っているのは患者だけだと告発した。

■ 精神医学の発展と看護教育

1. 精神医学の歴史

ディックスが哀れな狂人の為に奔走していた1840年(天保11年)代に至っても伝統的なアサイラム(Asylum)は精神病者の重要な抛り所であった。宗教団体は貧民保護のために犯罪者や負債を負った人々が、難を逃れる緊急避難場所の性格を持つアサイラムと、高齢者・孤児・病人など世話が必要な人々の一時宿泊所、あるいは養育院の性格のホスピタル(Hospital)という二種類の施設をつくった。中世から存在していたこのアサイラムは、18世紀末には狂気を根絶するための施設として考えられるようになった⁴⁶⁾。アサイラムに狂人を収容して、治療的な側面に関わった最初の人物はウィリアム・バットィ(William Battie 1703-1776)である。バットィは1751年(宝暦元年)の時点で、アサイラム、ロンドンの聖ルカ病院を創設した医務官である。また同時に彼は二つの大きな私立の狂人の家の所有者であり、医学専門学校の校長でもあった。バットィは治療上の長所をアサイラムに帰しており、一種の隔離療法によって患者の回復が可能であると考えた⁴⁷⁾。しかし、当時、多くの精神障がい者たちは救貧院に収容されていた。キリスト教的救済としての宗教的性格が強かったこれらの施策に対し、国家が介入した救貧法では、不労生活者は犯罪者もしくはその予備軍として扱われた。ゆえに、国家の安全を脅かす者に対しては、他の人々から隔離して懲罰や教育を与え、その性格を改造しようという意図がアサイラムの設立目的にはあった⁴⁸⁾。しかし、イギリスでも精神病者に対する一般的な取り扱いは粗悪であったと考えられ、ディックスの提言によって精神病院の改革がなされた。

フーコーは、狂人保養院の誕生は、心の激情や精神の混乱がゆっくりと和らぐとしてテュークとピネルの業績を評価した。クエーカー教徒であり、慈善家のテュークは、1796年(寛政8年)に初めて精神病者のための施設、ヨーク・リトリートを創設した。テュークの孫であるテューク・サミュエル(Tuke Samuel 1784-1857)は、テュークのヨーク・リトリートに強烈な刺激を受け、精神医学の開拓者になった。テュークによって導入されたモラル・トリートメントは医師と患者の人間関係の上に成立する治療法であり、生活環境を整え、患者の生活時間の中に散歩や、娯楽などを組み入れていく方法である。精神病の患者を鎖から解き放ち、人権思想に基づいて治療を施したのはフランスの精神科医のピネルである。

ピネルは1767年(明和4年)、トゥルーズ大学(フランス語版)で神学の学位を取得。その後トゥルーズ大学医学部に再入学し、1773年(安永2年)に学位を取得した。1774年(安永3年)、モンペリエ大学の医学部で臨床に関わる研究を続けた。1778年(安永7年)、パリへ赴き、市立の中央病院で心理学的解剖学的外科の臨床に関わり、骨格と関節の研究を行った。1785年(天明5年)に親友が急性の精神系疾患になったのをきっかけに、心理学的精神病理学医へ転向した。その後、ジャック・ベロムという人物がパリ郊外に建設した精神病患者の施療院に就職、さらに1792年(寛政4年)、当時パリ周辺の精神疾患

患者や囚人を一堂に収監していたビセートル病院に職を求めた。ジャコバン系の政府は当時38歳のピネルにビセートル病院の運営を任せた。その後30年以上にわたって、ピネルは、閉鎖病棟で鎖につながれている精神神経症患者と出会った。1793年（寛政5年）当時、フランス革命進行中であり、彼は、百科全書派の影響を受けた。彼は心理学を深く研究し、ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712-1778）や、当時のイギリスの心理学的精神科の臨床実績の影響を受けた。百科全書とは、フランス啓蒙思想の代表的な成果のひとつであり、1751年（寛延4年）から1772年（明和9年）にかけて、また1776年（安永5年）から1780年（安永9年）にかけて編集された大規模な百科事典である。この事典の編集に携わったのは、ルソーを始めとして哲学者のドゥニ・ディドロ（Denis Diderot 1713-1784）や、同じく哲学者のジャン・ル・ロン・ダランベール（Jean Le Rond d'Alembert 1717-1784）、ヴォルテール（Voltaire, 本名フランソワ＝マリー・アルエ（François-Marie Arouet 1694-1778）など、18世紀中頃の進歩的知識人たちである。百科全書は、異なる出身階層、多様な思想傾向を示す100人以上が執筆者となっており、この幅の広さが、あらゆる知識を網羅し、諸科学の関連を示すという『百科全書』の目的の実現を可能にした。既成の知的権威を否定し、自由な人間精神による知識の進歩と共有を信じる彼らながらも『百科全書』を完結させたことは、近代社会の幕開けを告げる出来事であった。

そして、フランスの傑出した思想家たちの影響を受けたピネルの医療は、心的療法（モラル・トリートメント）と呼ばれ、純粹に人道的な心理学的臨床を重んじる精神医学医療であった。その治療法で患者は、自身で病的特性の克服を学ぶことで心を強化し、自制という有益な習慣に導かれる。その経験を通じてモラルな方法で狂気を治そうと考えた。その改革は、薬の過剰投与を廃し、人道的な精神医学療法によって薬物療法の過度依存を戒めた。そして患者の人権を重視し、治験ではなく臨床による心理学的な温かみのある理学療法を重んじ、人道的精神医学の創設者となり、かつ、フランスの人道医療の先駆けとなった。

ピネルの業績はジャン＝バティスト・ピュサン（Jean-Baptiste Pussin 1745-1811）の貢献が大である⁴⁹⁾。ピュサン自身も精神障がい者として入院し、その病氣回復後に精神病院に雇用された。自己の経験も含め、精神病院における患者に対する取り扱いの惨めさに人道主義的な取り扱いの必要を感じた。特に当時、妥当とされていた瀉血による病気の悪化と生命の危険性は限りなく多く、死亡例も頻繁であった。ピュサンは「現在まで、殆どの病院において強暴な狂人は常に野獣と同じであると考えられ⁵⁰⁾」と述べ、通常、虐待が狂人を怒りに向かわせると述べている。ピュサンの主張、狂人は殴られるべきではない、狂人は縛られるべきではないという主張は看護に生かされ、看護をする者の教育にも生かされた。しかし、どれほどの精神病院に関わる医療者の胸に響いたのか？

精神病院を退院したビアーズはマサチューセッツ州のジョセフ・H・チョート（Joseph Hodges Choate 1832-1917）に面会希望の手紙を書いた。チョートはアメリカ法曹界の権威であり、外交官でもある。チョートはビアーズとの面談を快く受け入れ、翌日には面談することになった。チョートは、ビアーズの精神衛生改革の為の計画に対し、賞賛を与え、実現の為の具体的な指示をした。チョートとの面談は、彼の計画の早期実現に貢献した。ビアーズの能力は冴え、創造力も高まった。その間にジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill 1806-1873）の『自由について』を繰り返し読み、自身の心に抱いていた感情が固まった。1906年（明治39年）、物語の最初の作品が完成した。ミルが著作で自身の著作を他の人に見せたと述べたように彼はあらゆる人物に自身の原稿を渡した。そして、批評と忠告を求めるために、ハーバート大学のウィリアム・ジェームズ（William James 1842-1910）博士にも原稿を送った。博士から賞賛と同時に以下の内容の手紙が届いた。

「もし、私が百万長者で公共のために使えるお金を持っていたならば、とくに狂気のために使いたいとずっと思っていました。あなたは正気を失って世界に君臨していたときには、きっとかなり手に負えない性質だったでしょう。あなたとの面倒を避けるためには単なる機転ではなく、天才的な外交手腕が必要だったことでしょう。しかしあなたは確かに虐待を受けたわけですし、某病院の悪辣な医員の名前は公表されるべきでしょう。あなたの報告は医師にも看護師にも示唆に富んでいます。⁵¹⁾

手紙の文末には書き上げた本は書き直さない方が良くと助言している。そして、巻頭言に心理学者のジェームズ博士の最初の手紙を掲載許可の手紙が11月に新たに届いた。ビアーズは、この経験からコネ

チカットに精神衛生協会 (The Connecticut Society for Mental) を設立した。1909年 (明治42年), それは全国精神衛生協会 (The National Committee for Mental Hygiene) に発展した。この精神衛生協会は、精神医学者のアドルフ・マイヤー (Adolf Meyer 1866-1950) やジェームズ博士の推薦により多くの学者が会員となった。1930年 (昭和5年) には第一回国際大会が開催され、53カ国がワシントンに集まった⁵²⁾。アメリカではフロイトの精神分析を発展させたジョン・ワトソン (John Broadus Watson 1878-1958) が提唱した行動心理学, アブラハム・ハロルド・マズロー (Abraham Harold Maslow 1908-1970) 提唱の人間の欲求の階層論等の心理学が存在する。アメリカの看護研究者達は独自の理論に心理学を取り入れ、わが国もこれらの心理学から多くのものを学んでいる。

2. 精神看護の担い手を育成する

先述したようにアメリカで初めてナイチンゲール方式によって看護教育が開始されたのは1873年 (明治6年) の事であった。ディックスが参加した南北戦争の経験を契機に1871年 (明治4年), 雑誌『レディー・ナース』に看護婦は専門的知識を基に、十分検討したプログラム下で教育される必要があるとの記事が掲載された⁵³⁾。以降、アメリカに以下に述べる3つの看護婦養成学校が設立され、ナイチンゲール方式による看護教育が始まった。

- (1) マサチューセッツ総合病院のボストン養成学校 (Boston Training School)
- (2) ニューヘブン病院のコネチカット養成学校 (Connecticut Training School)
- (3) ニューヨーク、ベルビュー病院のベルビュー養成学校 (Bellevue Training School)

しかしながら、看護の質という意味で、アメリカ全土の病院の状況を改善するには時を要したようだ。特に精神病院の担い手は少なく、病人はほとんど放置され、無視され、その汚さと乱暴な取り扱いはぞつとさせられるような状況にあった。

『蛇の穴』の作者ウォードは主人公に言わせる。「精神病院での本当の看護婦というものは改革など考えずに命令を受けたら、素直に実行すべきなのよ。』⁵⁴⁾ 素直に命令を実行すること、それは指示された治療を従順に遂行すること、総じて監獄の監視員のものであることであった。そして、ピアーズが告発したのは精神病院の医師と看護師の劣悪さである。彼は精神病院の看護にあたる者達がどのようにして教育されたのか? 浮浪者が病院の門をくぐるとすぐに入浴させられ、衣服を与えられ、次の日には患者の前に看護師として立っていたと証言する。

1884年 (明治17年), アメリカの地を踏んだ内村鑑三が最初に行った仕事は看護人である。彼は、帝国政府の一官吏から白痴院の看護人としての経験を述べた。内村は勿論無資格者である。この白痴院はペンシルヴァニア州のエルフィンにあり、1864年 (元治元・文久4年) から、アイサック・ニュートン・カーリン (Issac Newton kerlin 1834-1893) 医師が院長であった。彼は、アメリカにおける精神医学の開拓者である。彼は、知的障害や発達障害のある患者が精神病院に収容されることを深く懸念していた。彼は「道徳的白痴」という表現をしているが、その“道徳的白痴”に関する院長の最大の主張は、両親の間違いと劣悪な環境によって生ずる体質上の墮落を意味しているということであった。彼は1863年 (文久3年) からペンシルベニア州の教育長の職にあった。

その後、アメリカでは実務看護を担うものとして男性看護人計画があった。通常は短期教育である。1888年 (明治21年), ニューヨークのベルビュー病院では、二年課程の職業学校があった。彼らは付添い人と呼ばれた。1943年 (昭和18年) には男性だけの看護学校は4校であった。有名なブラウン報告の一つに看護者として男性をもっと大々的に活用することである⁵⁵⁾ というような男性看護人についての提言がなされた。

1882年 (明治15年), アメリカで精神科の看護婦を教育する初めての学校として、マサチューセッツのマックリーン病院に看護婦の養成所が設置され、精神科看護の正しい認識が広まった。「精神科疾患に対する関心の増大は、体内あるいは体外から人間の中に病理学的変化を作り出し、人間を冒す要因の影響を明らかにし、心理分析へと次第に進んでいった。又、国民の保健問題として精神疾患の範囲について理解が増し、全ての人々の情緒的ニードの大きさや、人間行動を理解すべきあらゆる保健従事者の義務が目された。』⁵⁶⁾ ブラウン報告の提言では又、精神病院に各々独自の学校を経営させる代わりに、むしろ、

精神看護の場として精神病院の活用を考えることの必要性が述べられている。

3. 日本における精神医学の歴史

次に我が国の精神医療について論じる。わが国については筆者の『明治時代におけるわが国の近代的精神医療の萌芽と挫折に関する歴史的考察—精神病院設立経緯と精神障がい者看護に焦点を当てて—』⁵⁷⁾で若干の検証・検討報告がある。呉の『日本における精神病学ノ歴史』⁵⁸⁾によれば日本における最初の治療法は日本書記に記述されており、法律としては“大宝令”にあるとする。彼はその中に癡狂という二字を見出した。岡田靖雄著の『日本精神科医療史』⁵⁹⁾には、癡狂という言葉は奈良時代の“養老律令”に見られており、その意味は癡病・狂病の二種類をいうと説明されている。著作には「癡は発するときには地に倒れて涎沫をはき、覺をとるなきなり、狂はみだりにふれてはしらんと欲し、あるいはみずから高賢とし、聖神者となり」⁶⁰⁾と説明が加えられている。現在の精神疾患の中でも癡癡発作であろうと考えられる症状や統合失調症に見られる症状などが明記されている。癡狂という語源がここに由来し江戸時代も引き続き精神疾患には使われ、明治初期の精神病院に癡狂という言葉が使用されたと考えられる。

わが国では古くから狂人に対しては座敷率が一般的であった。『松沢病院外史』⁶¹⁾には明治初年の私宅監置の状況が掲載されている。間取り、清潔、取り扱いなど、私宅の経済状況によって相違があった。収容施設としては岩倉大雲寺（京都）、光明山順因寺（愛知県）、浄見寺爽神堂（大阪府）、武田癡狂院〔広島県〕など8ヶ所が存在した。これらの施設は多くが神仏に頼る方法で治療を行った。奈良林一徳（1822-1905）は、1846年（弘化3年）江戸小松川に癡狂病院を開設した。彼の治療は漢方薬によるものであった。この病院は1873年（明治6年）に小松川癡狂病院と改名、1901年（明治34年）には更に小松川精神病院と改名した。加藤照業（てるあき）は1875年（明治8年）、精神科を開業した。1878年（明治11年）には私立加藤癡癡病院を設立していたが、決して水準の高い医療ではなかった。

先述したように明治政府の欧州留学事業で精神病学として選任された榊は、1880年（明治13年）に東京大学を卒業、1882年（明治15年）にベルリン大学に留学し精神病学を専攻した、帰国後の1886年（明治19年）、東京帝国大学医学部精神病学講座担当教授に任命され、東京府癡狂病院内に精神病理学教室を置いた。1889年（明治22年）東京府癡狂病院は東京府巢鴨病院と改名後に四代目院長に就任したのは呉である。呉は、東京大学医科大学を1890年（明治23年）に卒業した後、大学院に入り、精神医学を専攻した。1896年（明治29年）に助教授となり、オーストリア＝ハンガリー帝国・ドイツ帝国へ留学した。留学中に、ウィーン大学のハインリッヒ・オーバーシュタイナー（Heinrich Obersteiner 1847-1922）教授に神経病理学を学んだほか、ハイデルベルク大学の神経科医のエミール・クレペリン（Emil Kraepelin 1856-1926）、神経病理学者のフランツ・ニッスル（Franz Nissl 1860-1919）、神経科医のヴィルヘルム・ハインリヒ・エルプ（Wilhelm Heinrich Erb 1840-1921）教授に師事した。榊院長の急死に伴い、1901年（明治34年）帰国と同時に、東京大学医科大学教授及び東京府巢鴨病院の四代目院長に就任した。呉の病院内改革は急速に進められた。無拘束治療、作業療法、病院規則の整備と看護婦の教育などである。作業療法の一環としてなされた将軍池や加藤山と呼ばれる築山を病院の一角に完成させた。これは現在でも残っている。また、近代欧州精神医学の導入と精神医学研究、精神医学教育（教科書と医師教育）を行った。

1918年（大正7年）に呉は、医学士樫田五郎（不詳-1938）と共同で『精神病者私宅監置の状況及びその統計的観察』⁶²⁾と題した報告書を内務省に提出した。彼はその序文に「精神病者ハ自ら知らズ自ら救フ能ハザル疾患ニ罹リ、其境遇ニ於テ最愁ムベキモノタルノ一方ニ於テ、社会ノ秩序ヲ危クシ公衆ノ安寧ヲ破ラントスル危険ナル證状ヲ呈スルモノナレバ、一面之ヲ救済シ一面之ヲ保護スルハ、吾人ノ責任ニシテ又吾人ノ義務ナリ」⁶³⁾と述べ、その病気は不治の病ではないので他の病気同様、適切な時期に入院させ、適切な治療を受けさせるべきであると述べている。この報告書は“精神病院法”の根拠になった。“精神病院法”の第一条には道府県に精神病院の設置を命ずることができると規定されている。また、呉はクレペリンの概念をわが国に導入した事でも知られる。クレペリンの精神医学はヴィルヘルム・マクシミリアン・ヴント（Wilhelm Maximilian Wundt 1832-1920）の心理学を基礎として樹立された。ヴ

ントはドイツの実験心理学者であり、自分の精神の内面を観察する内観という方法を用いて意識を観察・分析し、意識の要素と構成法則を明らかにしようとした。クレペリンは、内因性精神病において早発性痴呆と躁うつ病を対比させたが、心理学的方面では作業曲線の分析（クレペリン検査）で精神作業の量的分析を行った。

次に呉は、1917年（大正6年）東京府巣鴨病院移転の計画書と意見を東京府に提出した。結果、荏原郡松沢村への移転が正式に決定され、1919年（大正8年）、現在の地に松沢病院が新設された。この時代に制定された“精神病院法”と“精神病者監護法”は1919年（大正8年）から1950年（昭和25年）に効力を発していた。この法律で座敷牢などに閉じ込められていた精神障がい者が病院に収容されるようになった。“精神病者監護法”制定の背景には相馬事件⁶⁴というお家騒動が発端であるといわれている。この一連の騒動で精神病者の処遇に対する法律がないことが明らかになり、“精神病者監護法”によって精神病者の処遇の原則を定めた。しかし、自宅監禁から病院への収容は、社会からの隔絶をも意味し監禁同然の処遇であることに対しての問題提起が起こった。又、精神病者の食餌に関する問題の改善に尽力したのは、松沢病院の管理栄養士の鈴木芳次（1912-1989）である。彼は動物待遇から人間待遇へと自己の主張を基に精神病者の食における待遇改善に力を尽くした⁶⁵。

戦後の1950年（昭和25年）から1987年（昭和62年）には“精神衛生法”の時代である。この法律以後、精神医学が進歩し、人権意識が高まった。1987年（昭和62年）には“精神衛生法”が“精神保健法”に改正され、翌、1988年（昭和63年）に公布され1995年（平成7年）には“精神保健及び精神障がい者福祉に関する法律”に改定された。これらの法律改正によって我が国は私宅監禁から精神病院での治療、そして精神病院での閉じ込めから、社会復帰を促すような働きかけがなされ、更に自立支援へと法的整備もなされた。しかし、実際に、法律の適切な運用には社会における人々の偏見からの解放と精神病院の環境調整、そしてケアの在り方が伴わなければならない。

4. 日本における精神病院看護の担い手

かつてわが国では、看護の役割を果たす男性は看護人と呼ばれた。それでは男性の看護人はどのように教育されてきたのか。軍隊では衛生兵という呼称も一般的であったから女性を看護婦として教育する以前、精神病院の看護は男性がその役割を果たしてきた。

1869年（明治2年）に官軍によって設立された“大病院”規則には看病人に関する規定がある。これは男子だけの看護人ではなく、女性もこの仕事に従事した。看病人の仕事は、主として薬の管理と患者の日常生活の援助である。女性にのみ洗濯業務があった。1873年（明治6年）以降、陸軍衛生制度も整備され、看護人の等級も下士階級の陸軍会計1・2・3等看病人、兵卒階級の看病卒が置かれた。看病卒は看護人の指示に従って、与薬、食事の援助、回診介助、患者指導や患者の観察など、現在の実務看護を行った。つまり、1等看護人は2等看護人を、2等看護人は3等看護人を、3等看護人は看病卒にと業務の指示系統が明確になったのである。この頃、軍隊では看護人に対する教育が開始された。

1879年（明治12年）松沢病院の前身である東京府癲狂病院を、上野公園西北養育院に創設したが、看護にあたる人は全て男性であり、名称は救護人であった。その役割は日々患者に食事を与えることであった。1881年（明治14年）、精神病看護のために看護人を採用したが、当時の看護人の社会的地位が低い上に職業的自覚もなかったため、雑役婦と同じような仕事をしていた。もちろん、このころ、専門職としての看護婦を教育する機運はなかった。

明治中期の1885年（明治18年）にわが国では、初めてナイチンゲール方式によって看護教育が開始され、その教育は漸次、増加した。しかし、病院附属の養成所は自施設の為の養成であったから、卒業生は資格取得後附属された病院に従事することがほとんどであった。『松沢病院90年史』⁶⁶によれば、1901年（明治34年）、榊俣の弟、榊保三郎（1870-1929）が精神病院における看護者の質の向上を図るために、私的に看護者の教育を行い、その経験から『癲狂院に於る精神病看護学』をまとめ、看護者に配布した。『日本精神看護史』⁶⁷にその内容が記述されているが、具体的には、精神病者の定義、精神病看護人の性質、看護人相互の交際、看護人患者との交際、精神病者の床臥療法、監視区及監視義務、患者の逃走、患者強制器などについてである。保三郎は、精神病者は決して放火や殺人などの大罪を犯した人ではなく、

先天性あるいは後天性に脳の病を持った人たちであると考えた。彼は、看護者はその辺りを十分に留意して看護に当たるよう教育し、看護人の人格なども含め、看護者は身を高潔にして看護にあたるよう諭している。

1902年（明治35年）には看護者の採用にそれまでの体格検査から読書・習字・作文・算術などが加えられた。1906年（明治39年）には看護人養成規則が交付され、東京府巣鴨病院看護婦養成所が発足した。1919年（大正8年）に巣鴨病院が松沢の地に移り、東京府松沢病院附属看護婦養成所となった。呉の要請によって松沢病院に赴任した石橋ハヤ（1880-1961）が看護教育の責任を担った。石橋の患者に向き合う根本姿勢は患者との信頼関係であり、狂者の慈母”として慕われたという⁶⁸⁾。本養成所の他、1909年（明治42年）に設置された京都の岩倉病院附属看護学校、1920年（大正9年）、名古屋の東山脳病院附属看護学校の3校の教育修了者には、看護婦の免許が与えられた。しかし、この頃の精神病院看護を志す者は少なく、慢性的な長時間労働と看護の困難さは、闘争や虐待につながり、死亡率も高かった。呉が実施した拘束衣の廃止や患者を鎖から解放するといったモラル・トリートメントの実施には看護人たちには理解できなかったのか、強い反発があった。1915年（大正4年）に制定された“看護婦規則”の附則にも「准看護婦及び男子タル看護人ニ対シテハ本令ノ規則ヲ準用ス」と男子タル看護人という名称が使われているのを発見する。看護婦と言えば女子の職業とされた時代にあつて、男性看護人は精神病院や陸軍のみに限局された。1923年（大正12年）、精神科医で警視庁技術部金子準二（1890-1979）は、精神病院に看護教育機関の設置を義務づけたが、効果がなく、1929年（昭和4年）警視庁内規に1年以上精神病院の看護に従事した者で衛生看護法、救急治療及び精神看護の口頭試験に合格した者に男女を問わず精神科病院看護人としての資格を与えることにした⁶⁹⁾。『東京都衛生行政史』⁷⁰⁾によれば、1943年（昭和18年）東京府から東京都になり、都立松沢病院附属看護婦養成所と名称が変更した。この養成所は男女の別なく教育が行われた。ディックスの高邁な思想の元、精神医療が幕開けし、先人たちの努力空しく、悲しいかな、日本では、1983年（昭和58年）に栃木県宇都宮市にある精神科病院報徳会宇都宮病院で起きた事件では看護職員らの暴行によって、患者2名が死亡した。このことを契機に、国連人権委員会などの国際機関でも、日本の精神保健や精神医療現場における人権蹂躪が取り上げられ、世界中から日本国政府に非難が集中した。結果、1987年（昭和62年）には、“精神保健法”が成立し、精神障害者本人の意思に基づく任意入院制度や開放病棟を創設するなど、患者の処遇改善が図られた。

■ おわりに

本論では、身近に起きた日本の元内閣総理大臣安倍晋三氏殺害事件に衝撃を受けた筆者が、まさに、その狂気に満ちた行動と人を狂気にさせる諸問題の背景について検証・検討を試みたものである。狂気の世界については常人では計り知り得ない出来事でもある。狂暴な人を閉じ込めたり恥辱を与えたりすること、様々な環境因子が人の精神を病ませるという事、そうした精神障がい者に対するディックスの取り組みと我が国への影響、それ以降の精神病院の実態報告に等しい2人の自伝的小説の内容検証と精神医療の歴史を概観しつつ、精神看護のあり様について検討した。

『狂気の歴史』でフーコーは、狂気のせいで、悪しき本能・邪悪・苦悩・狂暴といった内面的世界、それまでずっと眠ったままであった世界が、突如として現れるのであると述べ、狂気が人間の究極的な真理を明るみに出すと論じている。果たして、日本を震撼させた狂気に満ちた犯罪行為は、犯人の内面性以上に社会の恥部を明らかにすることにつながったのかという問題は残される。犯人は、裁判の後に刑が確定したら当然のこととして刑務所に閉じ込められる。閉じ込めと恥辱に満ちた取り扱いを受けていた精神障がい者の人権の問題は又、別の次元のことであつたらう。精神を病んだ者と犯罪者は区別されなければならない。

ディックスの精神障がい者処遇改善の働きかけはアメリカのみならず、イギリスや日本にも及んだが、以前、残された課題の様に思われる。精神病院に収容されたビーズとウォードの自伝的小説が投げかける問題、それは精神病院の人的環境の問題であつた。そもそも、精神病院は患者の病んだ精神が回復する為に存在する。身体的病の回復と何ら変わらない。精神障がい者の認識と行動との関係がうまく連

動しないために、行動においてどこかぎこちなく、あるいは人とは違った行動をとるがために引き起こされる対人関係の問題を理解するには正直難しい。言うは易し行うは難しである。しかし、そうは言っていない。

ビアーズの『わが魂に会うまで』やウォードの『The Snake Pit』に見る限り、問題は、医療従事者が彼らに施療する際に行う説明と同意が皆無だったことである。彼らの認識違いという事もあるだろうが、何をされるかわからない患者の怯えた目と抵抗は、医療者の目には狂暴とみなされ、暴力的な抑え込みにつながり、相互の闘争に発展する。やはり、心を病んだ者が何をしでかすかという心理的圧力は、学問の世界ではなく、実践である。その実践の繰り返しの中で医療者と患者の信頼関係が構築されていく。相手を理解するという態度は目に現れ、患者を受容した態度になった時、対人関係が良好になり、信頼関係が生まれていく。であるならばやはり、基本的なところでは、ケアを行う者とケアを受ける側との信頼関係が重要なのであろう。そこには、相手に対する心からの敬意が必要である。

かくいう筆者自身、精神病院での看護の経験はない。が、しかし、一般病院にも精神を病んだ方々が訪れる。身体的病が死の恐怖につながってくることもあり得るし、精神が危機的状況に陥っている患者を多く観てきた。そうした精神の病に侵されている方々へのケアは身体のケア同様に看護者が心を傾けていかなければならない。今日、社会に解放された精神障がい者の社会的犯罪も論議される。しかし、精神障がいの多くが環境との関係で誘発され、社会的相互作用の希薄さが個人の病理を生むと考えたとき、そうならないように予防することの方が重要である。その意味では病気や貧困、社会的孤立にある人々に対する支援をどうするかと言うことが課題であり、環境と心と体の3者との関係を十分に理解する必要がある。

注

- 1) Michel Foucault (1961), *Histoire de la folie*, (田村健訳：狂気の歴史，新曜社，1975年.)
- 2) Michel Foucault (1961)：同前掲書1)，p.7.
- 3) Michel Foucault (1961)：同前掲書1)，p.30.
- 4) Brant, Sebastian (1494), *Das Narrenschiff*, (尾崎盛景，阿呆船上下，現代思潮新社，2002年.)
- 5) Edward Shorter, *A History of Psychiatry*, (木村定訳：精神医学の歴史，青土社，1999年.)
- 6) Clifford Whittingham Beers (1908), *A Mind That Found Itself*, (江畑啓介訳：わが魂に会うまで，星和書店，2003年.)
- 7) Mary Jane Ward, *The Snake Pit* (1941), (服部達訳：蛇の穴，岡倉書房，1950年.)
- 8) Josephine A. Dolan (1973)： *Nursing in Society*, (小野泰博他訳：看護・医療の歴史，誠信書房，1978年.)
- 9) Josephine A. Dolan (1973)：前掲書8)，p.428.
- 10) Brant, Sebastian (1494)：前掲書4)
- 11) Faustino Perisauli (1524), 谷口伊兵衛 訳：痴愚神の勝利，而立書房，2015年.
- 12) Faustino Perisauli (1524)：同前掲書11)，p.72.
- 13) Faustino Perisauli (1524)：同前掲書11)，p.67.
- 14) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，p.40.
- 15) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，p.58.
- 16) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，p.68.
- 17) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，pp.106-107.
- 18) Michel Foucault (1975)：監獄の誕生，新潮社，1977年.
- 19) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，p.168.
- 20) Michel Foucault (1961)：前掲書1)，p.540.
- 21) Edward Shorter：前掲書5)，p.61.
- 22) 浦野シマ著：精神科看護史，牧野書店，1983年.

- 23) スチュアート ホルブルック著：狂人病院の天使，リーダーズ・ダージェスト，1955年，8月号。
- 24) Tiffany, Francis, *The Life of Dorothea Lynde Dix*, Boston & New York: Houghton, Mifflin & Co, 1890.
- 25) スチュアート ホルブルック著：前掲書23), p.102.
- 26) 浦野シマ著：前掲書22), p.104.
- 27) Tiffany, Francis：前掲書24), p.82.
- 28) Mary Poovey Edited, *Florence Nightingale: Cassandra/Suggestions for Thought*, p.95, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 29) 内村鑑三著（1895），鈴木俊郎訳：余は如何にして基督信徒となりし乎，p.218，岩波書店，1999年。
- 30) 内村鑑三著（1895）：前掲書29), p.247.
- 31) Tiffany, Francis 著：前掲書24), p.360.
- 32) Tiffany, Francis 著：前掲書24), pp.360-361.
- 33) 松沢病院120周年記念誌刊行会：松沢病院120年史，星和書店，2001年。
- 34) 小野尚香著：精神衛生のあけぼの，保健婦雑誌，Vol.50, No.3, pp.241-243, 1994年。
- 35) 小野尚香著：癲狂院の医学的背景，保健婦雑誌，Vol.50, No.4, pp.326-329, 1994年。
- 36) 田中緑紅著：明治文化と明石博高翁，p.23, 明石博高翁顕彰会，1942年。
- 37) 田中緑紅著：前掲書36), pp.68-69.
- 38) 田中緑紅著：前掲書36), p.77.
- 39) 明石厚明著：明石博高，明石博高翁顕彰会，1916年。
- 40) 桜井景雄著：南禅寺の歴史，p.228，大本山南禅寺，1954年。
- 41) Clifford Whittingham Beers (1908)：前掲書6), p.46.
- 42) Clifford Whittingham Beers (1908)：前掲書6), p.129.
- 43) Mary Jane Ward (1941)：前掲書7), p.8.
- 44) Mary Jane Ward (1941)：前掲書7), p.204.
- 45) Mary Jane Ward (1941)：前掲書7), p.244.
- 46) Edward Shorter：前掲書5)
- 47) Edward Shorter：前掲書5), pp.24-25.
- 48) 滝内大三著：イングランド女子教育研究，p.176，法律文化社，1994年。
- 49) 藤葵著：Jean-Baptiste Pussin の精神病者看護思想，pp.41-56，日本看護歴史学会誌，No.16, 2003年。
- 50) 須藤葵著：前掲書49), p.47.
- 51) Clifford Whittingham Beers (1908)：前掲書6), p.245.
- 52) Clifford whittingham Beers (1908)：前掲書6), p.262.
- 53) Josephine A. Dolan (1973)：前掲書8), p.271.
- 54) Mary Jane Ward (1941)：前掲書7), p.244.
- 55) Josephine A. Dolan (1973)：前掲書8), p.385.
- 56) Josephine A. Dolan (1973)：前掲書8), p.429.
- 57) 佐々木秀美著：明治時代におけるわが国の近代的精神医療の萌芽と挫折に関する歴史的考察—精神病院設立経緯と精神障害者看護に焦点を当てて—，看護学統合研究，Vol.6, No.1, p.1-15, 2006年。
- 58) 岡田康雄編：呉秀三著作集，p.206，思文閣出版，1982年。
- 59) 岡田康雄著：日本精神科医療史，医学書院，2002年。
- 60) 岡田康雄著：前掲書59), p.4.
- 61) 金子嗣朗著：松沢病院外史，日本評論社，1982年。
- 62) 呉秀三・榎田五郎著：精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察，創造出版，2000年。
- 63) 呉秀三・榎田五郎著：前掲書62), p.1.
- 64) 相馬事件：1877年（明治10年）頃，旧相馬中村藩主子爵相馬誠胤（ともたね）精神病発病，1879年（明治12年）病状悪化，監禁願→座敷牢，1883年（明治16年），旧家臣錦織剛清が私宅監禁告発，

1883年（明治17年）加藤癲癇病院→東京府癲狂病院入院，発症鑑定は狂躁発作を有する鬱病。1886年（明治19年），錦織剛清は東京府癲狂病院入院中の患者を奪還，背後に時の内務省官僚後藤新平（1857-1929）などを担ぎ出し，不法監禁の告訴を行った。告訴されたものは相馬家の家令志賀直道（志賀直哉の父），先代胤の妻，東京府癲狂病院院長中井常次郎などであり，家族もこれに反して告訴をするなど，中井院長他錦織剛清もそれぞれ鎖につながれた事件である。

- 65) 鈴木芳次著：精神病と患者給食—その改革を求めて，第一出版，1990年.
- 66) 精神医療史研究会：松沢病院90年史，1972年.
- 67) 浦野シマ著：前掲書22)，pp.52-56.
- 68) 浦野シマ著：うつつなる狂者の慈母の歌と石橋ハヤ女史，pp.89-95，看護 Vol.28, No.7, 1976年.
- 69) 岡田靖雄著：精神科看護史の諸問題，日本医史学准誌第37巻，第3号，pp.1-27，1991年.
- 70) 東京都：東京都衛生行政史，1961年.